

本日の学び:「共に勝利の行進に」 テキスト:第二コリント2章12-17節

【理解の手がかりとして】

パウロは「人間の知恵によってではなく、神から受けた純真と誠実によって、神の恵みの下に行動してきた」(1:12)と言う。この自負観がすごい。彼は「このことは、良心も証するところ」(1:12)と言いい、彼はそれを「誇り」(1:12)としている。自分の言動に一かけらの恥も持っていない。パウロの生活には、隠れた行動も、隠れた動機も、隠れた意味もなかった。これはまさに私たちの目標とする事柄である。

パウロは以前に、「自分はコリントに行くつもりだ」と言ったのだが(1コリント16:1-9)、その計画を延期していた。それはコリント教会を思いやっていたことであった。コリント教会の状況を思い起こしておこう。そこには分裂して党派に分かれ、パウロの権威を認めない人たちもいた。権威を認めないということは、語り伝えられた福音(パウロの教え)に反した生活を送っていた、ということである。

そこでパウロは再訪断念の決心をする。この状態でたとえ訪問しても、逆効果であることが分かり切っていたからである。「喜びのために」(1:24)関わりたいのに、反対に「悲しませる」(2:1)結果を生むからである。「わたしの喜びはあなたがたすべての喜びであると、あなたがた一同について確信している」(2:3)と言うパウロ。言い換えれば、「あなたがたの悲しみはわたしの悲しみである」ということ。まさに「喜び人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」(ローマ12:15)のままである。

「わたしの喜びはあなたがたすべての喜びである」(2:3)と言うパウロ。彼は、自分に敵対する者を決して「共喜共泣」の関係から締め出さなかった。「悲しみの原因となった人」(2:5)とは、パウロに敵対していた(パウロの教えを攻撃していた)人のことである。コリントの信徒たち(パウロ派?)は、この人の誤りを公の場で指摘して断罪していた。彼らは、更にこの人に攻撃を加えようとしていたのだろう。しかしパウロはそれを望まなかった。

パウロは言う。「むしろ、あなたがたは、その人が悲しみに打ちのめされてしまわないように、赦して、力づけるべきです」(2:7)と。さらに「ぜひともその人を愛するようにしてください」(2:8)とも。パウロの心は常に「一致」にあった。「皆、勝手なことを言わず、仲たがいせず、心をついにし思いをついにし、固く結び合いなさい」(一コリント1:10)、「最も大いなるものは愛である」(一コリント13:13)、「神は無秩序の神ではなく、平和の神だからです」(一コリント14:33)と言ってきた。

「わたしが前に手紙に書いたのも、あなたがたが万事について従順であるかどうかを試すためでした」(第二コリント2:9)——この「従順」は<キリストへの従順>である。パウロにとって物事の観点は常に<キリスト>である。キリストに対してどう生きているか、それが最大の関心事である。そこでパウロはキリストの十字架の心をもって、敵対者への赦しを求める。教会こそがキリストの十字架に表された愛を实践すべき場所である、と。

12節に入り、パウロはもう一度、旅行計画の説明をする。トロアスでは大きな働き(伝道の成果)の可能性があった(「わたしのために門が開かれていた」とは、伝道推進の希望が大きかったことを表している)にもかかわらず、パウロはそこを去ってマケドニアに行くことを決心する。それはコリントの教会の様子が気がかりで仕方なく、会えるはずであったテトス(先にコリントに派遣しトロアスで会おうとしていた)を追ってマケドニアに向けて出発したのである。※この話はここで一旦中断し、7章5節以下になって再び取り上げられる。その箇所では私たちは、コリントから戻ったテトスの到着と、コリント

からの良い知らせとがもたらす喜びを聞くのである。

14-17節はとりわけ重要な箇所、パウロ自身の使徒職に関する自己理解を知る箇所であると言われている。それはまさにパウロの使徒職と権威を否定しようとするコリントの敵対者に対する論証とも理解できる。

その段落は、「神に感謝します」(2:14)、この言葉から始まる。前述のようにパウロには敵対者が多かった。しかし神はいつでも味方であり、理解者であり、信任者であった。彼は決して孤独ではない。「自分は神に属するもの」との確信が揺らがない。それを可能にしているのは「キリスト」である。キリストによって彼は神のものとなっている。この徹底した救いの自負心が、彼を支えている。

彼は自分のことを、まさにキリストそのものと同一視しているかのようでもある。彼はキリストその方ではないが、彼の言動はキリストの「香り」(2:14, 15, 16)である。彼が歩けば、周りの者たちはキリストを知る香りを嗅ぐのだ、という。また彼は、自分が為す行動が、人々の魂の救いの問題に直結することを自認している。福音の言葉を託され、それを伝える者の厳格な使命感がここにある。「わたしが今語らねば、この人は救われぬ」、そのような瀬戸際の出会の中をパウロは生きている。そのような真剣勝負で使徒として生きている。

それに比べて、当時の世には「神の言葉売り物」にした、不純・不誠実、すなわち私利私欲のために活動する説教者がいた。パウロを批判する人々は、パウロをそのような者たちと同一視して批判していたのだろう。ゆえにパウロは言う。わたしは「神の言葉売り物にせず、誠実に、また神に属する者として、神の御前でキリストに結ばれて語っています」(2:17)と。

まとめとして・・・「キリストを知る知識の香り」を漂わせる者になりたいものである。「キリストを知る香り」、それは一体どんな「香り」だろうか？ また、パウロのように、キリスト者(キリストに結ばれた者)として、不遜ではない強い自負心を持つ者でありたいと思う。「透明なクリスチャンになる」(G・バークレー)、すなわち「私」ではなく「キリスト」が伝わる者へ、との招きの言葉を思い出す(関東学院での記念講演より)。

『聖書教育』より

- 「私たちも神の恵みによってキリストに結ばれています。精一杯にキリストに仕え、従って行きたいと思えます。そこには私がいるのではなく、主なる神によって結び合わせられたキリストがいるのです。」(聖書の学び～キリストに結ばれて)